

日本學報 別刷本

第76輯・pp.11~28

格助詞ヲ、ニの Kategorie 構造と韓中日本語学習者の Kategorie 形成

森山新・水口里香

morishin.shin@ocha.ac.jp・mizurika@hotmail.com



韓國日本學會

2008. 8

<http://kaja.or.kr>

格助詞ヲ、ニの Kategorie 構造と韓中日本語学習者の Kategorie 形成

森山新*・水口里香**

morishin.shin@ocha.ac.jp・mizurika@hotmail.com

<要 旨>

本稿は格助詞ヲ、ニの Kategorie 構造と習得との関係を実証的に明らかにすることを目的とする。

ヲには「対格」、「場所」、「状況」、「時」の4つの下位 Kategorie が存在し、プロトタイプは「対格」であった。またニには「移動先」、「動作の相手」、「存在の位置」、「経験主」の4つの下位 Kategorie が存在し、プロトタイプは「移動先」であった。これにより、認知言語学的観点からの格助詞の意味構造分析は妥当性が確認されたが、同時にこれまで不足がちであった実証的研究の必要性も確認された。

ヲの習得については、韓国学習者(KJL)、中国学習者(CJL)とも日本語母語話者(JNS)の Kategorie とは若干異なっていた。またニについては、下位 Kategorie の境界が曖昧であり、一部で母語の影響も見られた。いずれにしてもJNSの Kategorie にかなり近づいてはいるものの、一致するところには至っていなかった。

最後に習得とプロトタイプとの関係については、ヲでは「対格」、ニでは「移動先」の習得が進んでおり、第二言語習得においてもプロトタイプの習得が早いということは確認できた。但しプロトタイプと Kategorie 形成との関係についてはさらに考察が必要であろう。

キーワード：格助詞、ヲ、ニ、認知言語学、第二言語習得

1. はじめに

2000年以降、「応用認知言語学」が叫ばれ、認知言語学が言語習得・教育研究へ応用されはじめている。また2004年に改定された日本語教育能力検定試験・出題範囲を見ると、「言語と心理」の区分に認知言語学が加えられている。では認知言語学は本当に第二言語としての日本語の習得・教育研究に応用できるのであろうか。

Tummers et al(2005)、早瀬・堀田(2005)は、認知言語学が使用を基盤とした言語観を有しながら、これまで生成文法同様、内省に頼りがちで、コーパスなどの言語使用データをあまり用いてこなかったという方法論上の問題点を指摘している。認知言語学における実証的研究の必要性は、習得や教育への応用を考える際にはよりいっそう重要となる。

本研究は認知言語学的観点から格助詞ヲ、ニの意味構造と習得との関係を明らかにするものである。具体的な研究課題は以下の3点である。

①これまで認知言語学の観点から理論的に提示されてきたヲ、ニの意味構造をデータを用い、実証的に明らかにする。具体的には Kategorie の下位 Kategorie (3.1、4.1)、及びプロトタイプ(3.2、4.2)を明らかにする。

* お茶の水女子大学大学院准教授

** 弘益大学校教養外国語学部専任講師

②認知言語学では言語習得をカテゴリー形成のプロセスと考えるが、そのような点から第二言語習得を考えた場合、ヲ、ニの意味カテゴリー構造は韓中日本語学習者と母語話者とでどのような違いが見られるか。また韓中日本語学習者のカテゴリー構造は学習者の母語の影響が見られるか(3.3、4.3)。

③認知言語学ではプロトタイプ理論を踏襲し、習得はプロトタイプが先になされると考えてきたが、その妥当性を実証的に検討する(3.4、4.4)。

その上で、これらの成果を第二言語としての日本語教育研究に生かすことを目的とする¹⁾。

2. 先行研究

上記の研究課題は、格助詞デに関しては、水口・森山(2006)が①、②について、森山・冉(2008)が②について、さらに森山(2006a、2006b)が③について行っている。しかしながらヲ、ニについての研究はまだない。そのため本稿ではヲ、ニについて検討していく。

3. 格助詞ヲ

3.1. 意味カテゴリー構造

まず、格助詞ヲのカテゴリー構造について考察する。表1は東京のN大学の日本語母語話者(JNS)43名を被験者に、ヲが用いられている15の文を似た意味でグループ分け(カテゴリー分類)してもらった結果を多次元尺度解析したものである。15の文は、財団法人日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』のヲの例文として用いられているものを用いた。そのため、他動詞文の「対格」用法に含めた使役文の「対格」用法が加わっている。また「状況」の用法がなかったため、これを加えた。またヲ格名詞や述語が同じにならないよう、若干用語に修正を加えた。

調査対象者から得られたデータをもとに類似性行列を作成し、統計解析ソフトSPSS(Ver.12)を用いて多次元尺度解析を行った。統計処理の結果、得られた適合度は2次元でStress=0.24535、RSQ=0.80870²⁾、3次元でStress=0.14939、RSQ=0.90061で、3次元が2次元よりもストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。但し、図1は、2次元である紙

1) なお、本研究では習得に直接影響を及ぼすと考えられるプロトタイプと意味カテゴリー構造について実験的に明らかにし、カテゴリー形成においてプロトタイプとともに重要な概念であるスキーマについては、母語話者と学習者でどのようにスキーマが形成されているのか、及び母語話者と学習者のスキーマはどのように異なっているのかなどを検証することができていない。スキーマ形成も母語話者と学習者とは異なる可能性があり、そこに母語の影響も考えられることから、この点については稿をかえて述べることにしたい。

2) Stress値とは、データを2次元(もしくは3次元)平面にあてはめたときの適合の程度を示す値で、0に近いほど適合が良い。そしてRSQとは決定係数のことで、1に近いほどあてはまりが良いとされている。

面に描く都合上、3次元よりも見やすい2次元の図で示すが、表1は3次元の数値、図1は2次元の数値であるため、両者の数値は似た傾向を示すが、完全には一致しない。表1で曇りがかかっている部分が+0.5を上回る数値で、本文中では「+」と表記する。▲は-0.5を下回っている数値で本文中では「-」と表記する。+0.5~-0.5の場合は「±」と表記する。

表1 JNSの格助詞ヲの多次元尺度解析の結果

NO.	用例	用法	第1軸	第2軸	第3軸
1	子供【を】なぐる。	対格	1.4190	0.4082	0.5592
2	家【を】建てる。	対格	0.9346	0.7378	0.8288
3	本【を】貸す。	対格	0.9163	0.5801	0.8626
4	母【を】恋しがる。	対格	1.8793	-0.1247	0.0836
5	駅【を】出る。	起点	▲1.2271	0.8305	0.2537
6	故郷【を】去る。	起点	▲1.3478	0.5647	0.2998
7	大学【を】卒業する。	起点	-0.3425	-0.4780	1.3437
8	橋【を】通過する。	経路	▲1.3528	0.5123	-0.1915
9	空【を】飛ぶ。	経路	▲1.2173	0.7928	▲0.5132
10	道【を】渡る。	経路	▲1.0733	0.9432	-0.2731
11	思春期【を】経て大人になる。	時	-0.3563	▲2.1412	-0.1231
12	4年間【を】過ごした。	時	-0.3648	▲2.1809	0.3753
13	水【を】凍らせる。	使役	1.6161	0.1911	▲1.1168
14	選手【を】走らす。	使役	1.7988	-0.1032	▲1.1810
15	雨の中【を】行く。	状況	▲1.2823	▲0.5329	▲1.2058

母語話者は表1の3つの軸が表す基準に基づいてヲの用法をカテゴリー化していると考えられる。

第1軸は「対格」及び「使役の対格」用法で+の値、「起点」、「経路」、「状況」などで高い-の値を示していることから、参与者としての「個性性（+が個性性、-が場所性）」を表すと考えられる。「時」は-の値が小さいが、これは「時」が「個性性」を有さず、かといって「場所性」も低いことによると思われる。

第2軸は「時」や「状況」で高い-の値を示しており、その他の多くでは+の値を示していることから、「具体性（+が具体性、-が抽象性）」であろう。

第3軸については、「対格」用法の一部、「起点」用法の一部が高い+、「使役の対格」、「状況」、「経路」の一部が高い-となっているが、これが何であるか不明である（2次元と3次元のStress、RSQの値は近接しているため、第3軸は基準としてあまり作用していない可能性もある）。

図1を見ると、ヲのカテゴリーは大きく4つに分かれている。第一が「+個性性、+具体性」の「対格」の用法で、「使役の対格」も同じカテゴリーとしてまとまっている。第二が「-個性性、+具体性」の「場所」用法であり、「起点」と「経路」との区別ははっきりしたものとはなっておらず、1つのカテゴリーとしてまとまっている。第三が「-個性性、-具体性」の「状況」用法

で、第四が同じく「－個性性、－具体性」の「時」用法である。⑦の「起点」用法が「場所」の категорияから外れ、「時」の categoriaに近づいているが、これは⑦の「大学」が場所の起点としての意味と時の起点としての意味を兼ね備えているためであると思われる。

以上のようなことから、格助詞ヲの用法は、「対格」、「場所」、「状況」、「時」の4つの下位 categoriaに分けられる。

- ①対格 [+個性性、+具体性] : 対格、対格 (使役)
- ②場所 [-個性性、+具体性] : 起点、経路
- ③状況 [-個性性、－具体性] : 状況
- ④時 [-個性性、－具体性] : 時

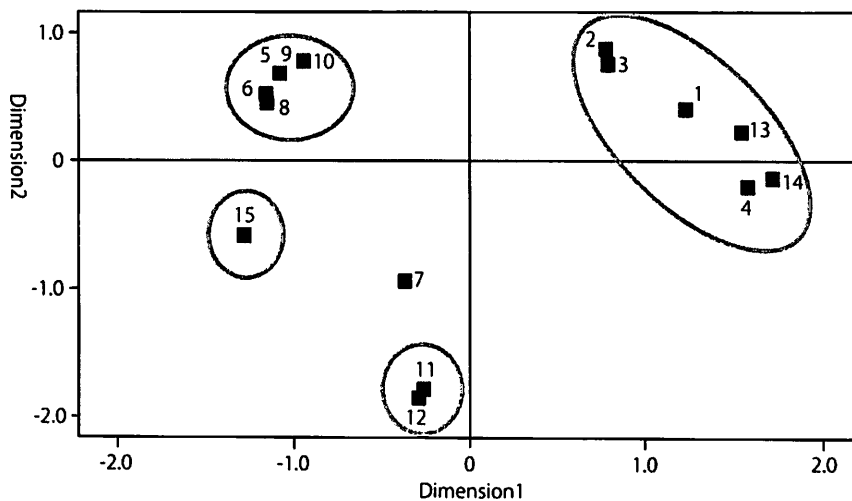


図1 JNSのヲの多次元尺度解析の結果

3.2. プロトタイプ

3.2.1. 想起実験から見たプロトタイプ

次にJNSの想起実験により、ヲの意味構造について考えてみたい。表2は東京のO大学で学ぶJNS27名を被験者に、格助詞ヲが用いられている例文を思いつく順に5つ書いてもらったものである。

表から明らかなように、最初に想起された文は全て対格の用法となっている。また5回全体でも、対格の用法が9割を越えている。以下の格助詞ニ、デの場合でわかるように、想起実験では簡単な文を想起してもらうため、意味的に背景的で、文の成分として随意的なものより、意味的に前景的で、文の成分として必須のものが想起されやすい。ヲの用法はいずれも意味的には

前景的で、文の成分としても必須の項であるが、「対格」用法では「参与者」であるのに比べ、「場所」や「状況」、「時」の用法は背景的であるため、「対格」用法が「場所」や「時」などの用法に比べ想起されやすいことは事実である。それでも「対格」が圧倒的な割合を占めていることから、ヲ格のプロトタイプは「対格」で、「場所」がこれに続き、「状況」、「時」へ拡張したと考えられる。

表2 JNSのヲを用いた例文の想起実験の結果

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	合計
対格	27	27	24	24	25	127
場所			3	2	2	7
状況						0
時				1		1
合計	27	27	27	27	27	135

3.2.2. JNSの使用頻度から見たプロトタイプ

次にJNSが、実際の発話において、どのような用法をどれだけ使用しているかについてみる。表3は上村コーパスを用いて、JNS10名の発話に見られるヲの使用回数を集計したものである。これを見るとわかるように、ヲの使用は圧倒的に「対格」の用法が多く、「場所」がこれに続いている。このことからヲ格のプロトタイプが「対格」であり、「場所」、「状況」、「時」の用法がそこからの拡張であることは間違いないであろう。

表3 JNSのヲの使用頻度（上村コーパスによる）

	対格	場所	状況	時
使用回数	223	5	1	1

3.2.3. 母語習得過程から見たプロトタイプ

最後に母語習得過程からヲのプロトタイプを考えてみたい。母語習得過程では、最初ほとんどの発話でヲが省略される。そのためここでは実際にヲが使用されている発話を見ていきたい。大久保(1967)では、ヲが用いられるのは2;11(2;11とは2歳11か月を意味する)以降で、初期の使用はどれも対格の用法であった。このことからヲのプロトタイプが「対格」であることは疑いえないであろう。

また大久保(1973)では、年少(3;3-4;4)69名、年中(4;1-5;6)121名、年長(5;5-6;6)115名に調査を行っている。表4はその概略をまとめたものである。表の中で()内の数字はヲが省略されているものである。「物+ヲ」、「人+ヲ」は対格、「場所+ヲ」は場所の用法であると考えられる。そうすると、年少のヲの使用は対格5 > 場所格1であり、対格の使用が場所格より多くなっている。使用頻度は必ずしも習得順序を表すとは言えないが、やはり対格の習得が場所格の習

得より進んでいる傾向は見てとれるであろう。

表4 母語習得におけるヲの産出 (大久保(1973)より)

	年長	年中	年少	用例(年少)
物+ヲ	11(86)	4(84)	4(88)	オミジュヲ アゲテンノ。
人+ヲ	0(1)	0(2)	2(2)	ネズミヲ タベヨウト シテル。
場所+ヲ	0(1)	2(5)	1(5)	ドウロヲ ワタッテ イクノ。

3.2.4. ヲのプロトタイプ

以上、検証したように、プロトタイプの用法は「対格」用法であり、次いで「場所」用法が続くことがわかった。

3.3. 学習者のカテゴリー形成

次に多次元尺度解析を用いて、学習者のカテゴリー形成の特徴について調べる。方法は3.1.1で用いたものと同じで、韓国、中国で日本語を学ぶ学習者（以下、それぞれKJL、CJLとする）を被験者にして実施した。

KJLは、韓国S大学で中級日本語会話を受講している3、4年生24名、及び日本語能力試験2級以上を取得している2年生6名の計30名である。日本語レベルは日本語能力検定試験2級合格者(もしくはJPT2級レベル)が11名、1級合格者が6名おり、その他の学生も日本語能力試験2級レベル以上であり、本調査の調査文に使用されている語彙を全て理解するに十分なレベルであった。調査は韓国では2007年10月に実施した。

CJLは、中国K大学日本語学科の3年生計42名である。調査時に日本語能力検定試験2級合格者が9名、1級合格者16名おり、その他の学生も日本語能力試験1級準備中であり、本調査の調査文に使用されている語彙をすべて理解するに十分なレベルであった。調査は2007年9月に実施した。

3.3.1. KJL

統計処理の結果、得られた適合度は2次元でStress=0.26049、RSQ=0.81391、3次元でStress=0.17857、RSQ=0.86481で、3次元が2次元よりもストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。図2左はKJLのデータを示している。但し、図2は見やすい2次元の図を示す。

これを見ると、「対格」、「場所」、「時」の用法がまとまりをなしている。但し、⑦の「起点」用法は、JNSでは「場所」と「時」の用法の中間に位置していたが、KJLでは、より一層「時」の用法に近づいている。また「状況」用法も「場所」用法と区別がなくなっている。

3.3.2. CJL

統計処理の結果、得られた適合度は、2次元でStress=0.27579、RSQ=0.76563、3次元でStress=0.14070、RSQ=0.93367で、3次元が2次元よりもストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。図2右はCJLのデータを示している。これを見ると「対格」、「経路・状況」、「起点」、「時」という4つのカテゴリーに区別されている。

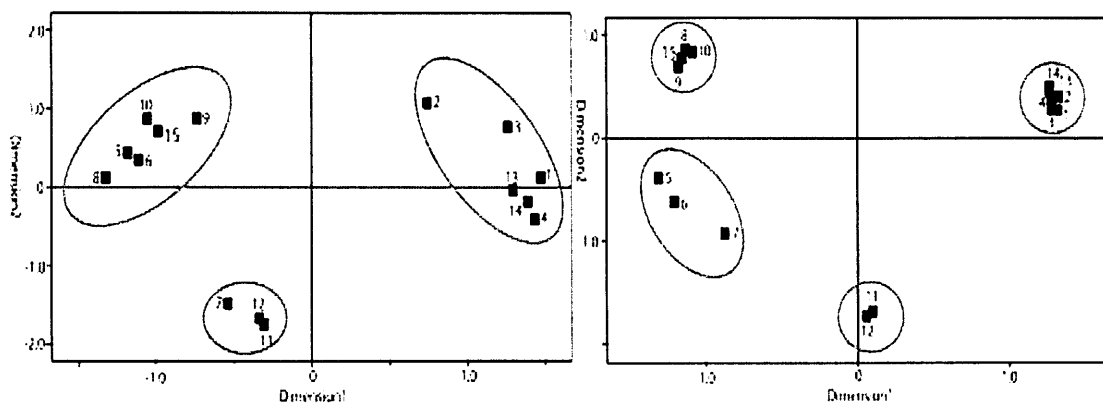


図2 KJL・CJLのヲの多次元尺度解析の結果

3.3.3. JNSとKJL、CJLとの意味構造の比較

以上、KJL、CJLのヲの意味構造を実験的に調べてきた。ヲのカテゴリー区分は、JNSだけではなく、学習者においてもその境界が比較的是っきりしており、区別はそれほど難しくないようである。しかし細かく見ていくと、JNSでは「対格」、「場所（起点・経路）」、「状況」、「時」の4つのカテゴリーに分かれていたが、KJLでは「対格」、「場所・状況」、「時」の3つのカテゴリー、CJLでは「対格」、「起点」、「経路・状況」、「時」の4つのカテゴリーに分かれており、JNSのカテゴリーとはやや異なっていた。JNSと学習者との違い、KJL、CJLとの違いに母語の影響があるのかは、これだけではわからないので、今後の課題としたい。

3.4. 習得過程

次に第二言語習得過程において、格助詞ヲの意味・用法が如何に習得されているのかを、認知言語学で主張する意味カテゴリー構造との関係の中で分析、考察する。JSL（第二言語としての日本語）の習得データはKYコーパスを用い、中(表5のC)、韓(表5のK)、英語(表5のE)母語話者の初級から超級までのデータを分析し、レベルごとのヲの意味・用法の使用（正用）実態について調べ、その習得のプロセスを分析、考察した。被験者は各母語とも初級(表5の1)5名、中級(表5の2)10名、上級(表5の3)10名、超級(表5の4)5名の合計30名で、3言語全体で90名である。

表5はその結果をまとめたものである。これらを見ると一目瞭然だが、KYコーパスを見る限り、学習者のヲ格の使用(正用)は母語に関わらず、圧倒的に「対格」が多く、「場所」の用法はどの母語話者も中級以降で現れ、学習レベルの上昇につれ使用がわずかに増える程度で、「時」はKJLのみ超級で1回、「状況」はどの母語話者でも使用されなかった。さらにどの母語話者も初級ではすべて「対格」の用法で用いられており、「場所」、「時」の用法は見られていない。すでに述べたように「対格」以外の使用はJNSでも少ないことから、単なるインプット頻度の影響や使用の機会が少ないだけといった解釈も可能であるが、最初に出現するのが、「対格」が初級、「場所」で中級、「時」と「状況」は超級またはそれ以降であるため、このことから習得はプロトタイプの「対格」から始まり、その他の用法へ拡張していく、すなわち習得順序は「対格→場所→時・状況」であると考えても差し支えないであろう。

表5 ヲの用法別の正用頻度の変化

	C1	C2	C3	C4	E1	E2	E3	E4	K1	K2	K3	K4
対格	24	82	213	123	11	112	257	90	14	225	238	226
場所	0	1	7	6	0	5	5	2	0	4	3	4
状況	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
時	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	24	83	220	129	11	117	262	92	14	229	241	231

4. 格助詞ニ

4.1. 意味カテゴリー構造

本節では、格助詞ニの様々な用法が実際にどのようなネットワークを構築し、1つのカテゴリーとしてまとまっているのか、及びニのプロトタイプ的な用法は何かについて、具体的なデータを参照しながら分析を行う。

まず、格助詞ニのカテゴリー構造について考察する。東京のO大学の日本語母語話者26名を被験者に、ニが用いられている20の文をカテゴリー化してもらったデータをもとに類似性行列を作成し、格助詞ヲ同様、SPSS (Ver.12) を用いて多次元尺度解析を行った。統計処理の結果、得られた適合度は2次元でStress=0.27330、RSQ=0.73705、3次元でStress=0.16823、RSQ=0.86696で、2次元よりも3次元の値がストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。但し、図3はヲと同様、3次元よりも見やすい2次元の図を示す。

表 6 JNSの格助詞ニの多次元尺度解析の結果

文	用法	第1軸	第2軸	第3軸
先生がごみ箱【に】ごみを捨てた。	移動先	▲1.4714	0.2079	▲0.5630
兄は仕事で東京【に】行った。	移動先	▲1.5286	0.1283	▲0.8006
社長は今、食事【に】出ています。	目的	▲1.5746	0.2000	0.0487
祖母は病気【に】苦しんでいる。	原因	-0.3948	0.1189	1.7536
氷が水【に】なった。	変化の結果	▲0.8703	0.4502	1.3391
母親は娘【に】牛乳を飲ませた。	使役の相手	1.2437	1.2753	▲0.5480
夫を亡くした洋子は長女【に】働かせた。	使役の相手	1.2437	1.2754	▲0.5480
太郎が次郎【に】ボールを投げた。	動作の相手	0.5895	1.4224	-0.2652
昨日、友だちはかつてのBF【に】会った。	動作の相手	0.5592	1.3958	0.3888
花子は真一【に】花束をもらった。	授与主	1.0779	1.2988	0.1696
警官は男【に】殴られた。	動作主	1.4085	1.0313	-0.3815
庭【に】小さな池がある。	存在の位置	▲0.9398	▲0.8153	▲1.3251
父は今、旅行会社【に】勤めている。	存在の所属	▲1.4715	0.0145	▲0.7332
彼は毎朝8時【に】起きる。	時間	▲0.9355	▲0.6446	0.9895
私の学校は海岸【に】近い。	空間的基点	▲1.2392	▲0.5293	▲0.9011
この素材は熱【に】とても強い。	抽象的基点	0.0901	▲0.6041	1.5972
彼女【に】孫が1人いる。	所有主	1.0351	▲1.6280	-0.1288
私【に】富士山が見える。	知覚主	0.9928	▲1.6815	-0.0842
彼【に】ピアノが弾けるはずがない。	能力主	1.0249	▲1.6425	-0.0883
その学生【に】はその一言がとてうれしかった。	感情主	1.1504	▲1.4734	-0.1292

表 6 を見ると、第 1 軸は、二格が人である用法が +、人でない用法が - となっている。これは二格が人であるかどうかがカテゴリー形成の 1 つの判断基準となっているということの意味するが、本稿では、人の場合には「能動性」を有した「能動的参加者」で、場所など、人でない場合には「能動性」は失われるため、「能動性」とする（詳しくは森山 (2008b) を参照のこと）。

次に第 2 軸は何らかの動力連鎖や移動を伴う「プロセス的用法」が +、動力連鎖や移動を伴わない「存在論的用法」が - となっていることから、カテゴリー形成の 2 つ目の判断の基準は「事態のプロセス性」であろう。

第 3 軸は、変化を移動のメタファーとして表した「変化の結果」、精神的な因果関係を表した「原因」、抽象的空間としての「時点」、抽象的な尺度の基点である「抽象的基点」などが高い + の数値となっており、3 つ目の判断の尺度は「抽象性」であろう。「変化の結果」、「原因」は「移動先」の拡張的用法で、「時間」は「存在の位置」、「抽象的基点」は「空間的基点」の拡張的用法であり、それぞれにおいて抽象性が高くなっていると推測される。なお、「父は今、旅行会社【に】勤めている。」は「存在の所属」と考え、「存在の位置」のカテゴリーに含まれると考えていたが、図 3 を見ると、「存在の位置」に距離的には近いものの、むしろ「移動先」に近い用法であると思われる。

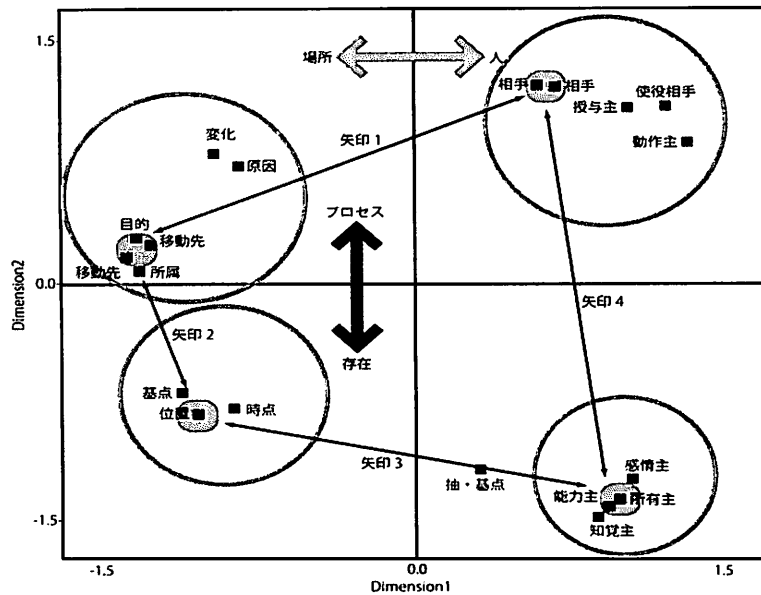


図3 JNSのニの多次元尺度解析の結果

JNSはこれら3つの判断の基準により、格助詞ニのカテゴリーを分類していると思われる。第1軸は「能動性」だが、英語のようなスル型言語では、だれが何をスルか、すなわち参与者とその動力連鎖を中心とした把握がなされることから、参与者とその動作が重視され、与格のプロトタイプは参与者(人)である「動作の相手」となる。言い換えれば「能動性」を有するほうがプロトタイプとなる。これに対し日本語のようなナル型言語では、その場で何がナルかが重要となる。そのため「場所における生起」すなわち「場所とそこでの移動や変化」が重視され、その結果、「移動先」のように「能動性」を有さない用法がプロトタイプとなると考えられる(プロトタイプについての実証的な考察は4.2で詳細に行う)。第2軸は「プロセス性」と「存在性」のどちらがプロトタイプであるか判断が難しいが、以下の想起実験の結果を見ると「プロセス性」を有する「動作の相手」や「移動先」が、「存在性」を有する「存在の位置」や「時点」に比べて想起されやすいことから、「プロセス性」がプロトタイプであろう。第3軸は、一般的に抽象的用法は具体的用法の拡張的用法であることから「具体性」がプロトタイプであろう。

そのように考えると、ニのプロトタイプは「-能動性(場所)」で「+プロセス性」で「+具体性」の「移動先」がプロトタイプとなる。

またニのカテゴリーは以下の4つに分けることができる。

- ① [+プロセス、-能動性] : 「移動先」など
- ② [+プロセス、+能動性] : 「動作の相手」など
- ③ [-プロセス、-能動性] : 「存在の位置」など
- ④ [-プロセス、+能動性] : 「経験主」の各用法

なお「具体性」は4つの下位カテゴリー内でプロトタイプの度合いを決定する1つの要因に

なっていると思われる。例えば①では「移動先」のような「+具体性」の用法がプロトタイプで、「目的」、「変化の結果」のような「-具体性」の用法がその拡張的用法である。同様に「時間」、「抽象的基点」も「-具体性」の用法で「存在の位置」のカタゴリの拡張的用法である。このように二のカタゴリ形成はまずは第1軸の「能動性」と第2軸の「プロセス性」とで特徴づけることができる。

4.2. プロトタイプ

次にJNSを被験者とした想起実験、使用頻度、母語習得などの実証的なデータに基づき、二のプロトタイプは何であるかを考察する。

4.2.1. 想起実験からみたプロトタイプ

まずJNSの想起実験により、二の用法のプロトタイプは何かについて考えてみたい。表7は東京のN大学で学ぶJNS51名を被験者に、格助詞「ニ」が用いられている例文を思いつく順に5つ書いてもらったものである。

これを見ると、最初に想起される用法では「動作の相手」と「移動先」が多いが、それ以降では「移動先」が多くなり、全体では「移動先」のほうが多くなっている。想起実験では、簡単な文を想起してもらうため、意味的には場所のように背景的で、文の成分としても随意的なものより、参加者のように前景的で、文の成分としても必須のものが想起されやすいことがわかっている。そう考えると、想起実験では、場所である「移動先」より参加者である「動作の相手」のほうが想起されやすいことになり、二のプロトタイプが「移動先」である可能性も高くなる。

またこれらに次いで多いのが「時点」と「存在の位置」用法である。最初は「存在の位置」用法が多いが、徐々に「時点」の用法も多くなっていることから、存在論的事態では、「存在の位置」用法がプロトタイプで、「時点」の用法がそれに次ぐ位置を占めていると思われる。

表7 JNSのニを用いた例文の想起実験の結果

	合計	No1	No2	No3	No4	No5
移動先	102	22	12	27	18	23
相手	75	23	25	10	8	8
使役相手	1			1		
目的	6		2	2		2
変化	9		3	1	4	1
動作主	8		1	1	3	3
原因	3				1	2
位置	15	4	6	1	3	1
時点	22	1	3	6	8	4
基点	4			2	1	1
その他	18	3	1	1	6	7
合計	262	53	53	52	52	52

4.2.2. JNSの使用頻度から見たプロトタイプ

次にJNSが、実際の発話において、どのような用法をどれだけ使用しているかについて見る。表8は上村コーパスを用いて、JNSの発話に見られるニの使用比率をまとめたものである。「移動先」には「目的」、「存在の位置」には「空間的基点」や「抽象的基点」も含まれる。また「相手(起)」は、「授与主」、「動作主」といった用法である。

10名の被験者の使用比率は似たような傾向を示しており、プロセス的用法では、ほとんどが「移動先」を表す用法で用いられ、「～になる/する」という形の「変化の結果」の用法もかなり見られる。想起実験で想起数が多く、プロトタイプの候補の1つとされていた「動作の相手」の用法は一部の被験者では見られるが、一般的に使用比率は少ない。この点から見るとニのプロトタイプは「移動先」であると思われる。前述したように想起実験では「動作の相手」が多くなっていたが、これは想起実験が簡単な文を想起してもらうため、意味的に前景的で、文の成分として必須のものがそうでないものに比べ想起されやすいことが1つの原因であろう。

存在論的用法においては、「時点」の用法が最も多く、次いで「存在の位置」の用法と続く。「経験主」用法は一部の被験者にわずかに見られるに留まる。「時点」の使用が多くなっているのは、1つには上村コーパスがOPIデータであり、その質問内容が「いつ」といった「時点」の使用を多くしていると考えられる。

表8 JNSのニの使用頻度(上村コーパスによる)

	MA(F)	TA(M)	TA(F)	WA(F)	YF(F)	YI(M)	GI(F)	KN(M)	KO(F)	MO(M)	合計
移動先	13	18	18	11	13	12	15	13	9	7	129
相手(着)			1	1		1				2	5
相手(起)									2		2
変化の結果	6	2	6	1	4	6	3	5	1	4	38
存在の位置	6	3	4	6	3	4	5	3	5	3	41
時点	9	8	8	5	3	6	8	7	5	5	64
経験主			2		1				1		4
合計	34	31	39	26	24	29	31	27	23	21	214

4.2.3. 母語習得から見たプロトタイプ

最後にJNSの格助詞ニの母語習得プロセスを明らかにし、カテゴリー構造とL1習得との関係について明らかにしたい。

吉田(1976)は幼児2人の発話資料を用いて2文節発話の言語習得過程を記述している。それによると、「移動先」や「存在の位置」などのニ格は1;8~1;9で最初の表出が見られるのに対し、「動作の相手」などを表すニ格は2歳を過ぎないと発話が見られない。「時点」を表す用法はさらに遅れ、2;2~2;3になって最初の表出が見られている。また男児1名の発話資料を用いて言語

習得過程を調べた岩立(1994)でも、「移動先」や「存在の位置」など、場所を表すニ格は2;0~2;1に発話が始まるのに比べ、「動作の相手」を表すニ格(与格)は2;4頃に発話が始まっている。

Kabata(2007)では3名の幼児のデータ (<http://talkbank.org>) を用いてニの使用を調べ、「移動先」や「存在の位置」などの空間的用法が、他の用法より習得が早いことを示している。

大久保(1967)はY児を被験者として発話データを集め、ニの使用は「移動先」が最も多く、次いで「存在の位置」となっている。「目的」や「になる/する」といった「変化の結果」も少ないながら初期から用いられているが、「時点」や「動作の相手」の使用はかなり遅れている。

3~6歳児115名を被験者に調査を行った大久保(1973)でも、年少者では「移動先」が多く「動作の相手」は少ない。

以上のことから母語習得では、「動作の相手」よりも「移動先」の習得が早いようであり、母語習得からも日本語のニのプロトタイプは「移動先」の用法であると考えられる。

4.2.4. ニのプロトタイプ

以上の考察を総合し、ニのプロトタイプが何であるか考えてみる。まず想起実験では「動作の相手」と「移動先」が想起されやすかった。使用頻度では圧倒的に「移動先」が多かった。母語習得では「移動先」と「存在の位置」の習得が早かった。これらを総合すると日本語の言語類型論的な特徴を考慮しての予想通り、「移動先」がニのプロトタイプであると言うことができそうである。

4.3. 学習者の категория 形成

次に多次元尺度解析を用いて、KJL、CJLの categoria 形成の特徴について調べる。

KJLは、韓国(ソウル)の2つの大学の日本語学科3年生21名、4年生13名の計34名である(但し、1枚のカードで1つのグループを作っていたり、どのグループに属するのかわからないカードがあった4名は分析対象から外したため、実際には30名分のデータが分析に用いられた)。日本語レベルは調査時に日本語能力検定試験2級合格者が7名・1級合格者が15名おり、その他の学生も日本語能力試験1・2級準備中であり、本調査の調査文に使用されている語彙をすべて理解するに十分なレベルであった。調査は2007年10月に実施した。

CJLは、中国K大学日本語学科の3年生計43名である。調査時に日本語能力検定試験2級合格者が9名・1級合格者16名おり、その他の学生も日本語能力試験1級準備中であり、本調査の調査文に使用されている語彙をすべて理解するに十分なレベルであった。調査は2007年9月に実施した。

4.3.1. KJL

統計処理の結果、得られた適合度は、2次元でStress=0.30658、RSQ=0.58051、3次元で

Stress=0.22231、RSQ=0.72543で、2次元よりも3次元の値がストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。但し、グラフは3次元よりも見やすい2次元のグラフを示す。図4左はKJLのデータを示している。

図4を見ると、JNS同様、KJLの場合も大まかにプロセスで場所である「移動先」、プロセスで人(能動的参加者)である「動作の相手」、存在で場所である「存在の位置」、存在で人(能動的参加者)である「経験主」の4つのクラスタに分かれている。しかし、そのクラスタがJNSのそれに比べるとやや拡散的で、隣のクラスタとの距離が短い。このことは、それぞれの下位カテゴリーが確立されておらず、かつカテゴリー間の境界も明確になっていないことを意味している。

一点、JNSと異なるのは、「変化の結果」が、「存在の位置」に区分されていることである。日本語では、「変化の結果」が移動のメタファーでとらえられているため、「移動先」の拡張と考えることができるが、これに相当する韓国語では、(1)のように、そのような移動のメタファーでなく、むしろ「～が成る」と「事態の成立」として、「存在の位置」に近いものと考えられたのであろう。これは日韓両語の違いが反映したものと注目してよいであろう。

(1) 물이 얼음이 되었다 (水が氷が成った)。

4.3.2. CJL

統計処理の結果、得られた適合度は、2次元でStress=0.30319、RSQ=0.59741、3次元でStress=0.20133、RSQ=0.79762で、2次元よりも3次元の値がストレス値も低く、RSQも1に近づいているため3次元の結果を用いる。但し、グラフは3次元よりも見やすい2次元のグラフを示す。図4右はCJLのデータを示している。

図4右を見ても、KJL同様、大まかにプロセスで場所である「移動先」、プロセスで人(能動的参加者)である「動作の相手」、存在で場所である「存在の位置」、存在で人(能動的参加者)である「経験主」の4つのクラスタに分かれている。しかし、そのクラスタがやはりJNSのそれに比べるとやや拡散的で、隣のクラスタとの距離が短く、それぞれの下位カテゴリーが確立されていない。また、「原因」が「存在の位置」のカテゴリーに含まれている点は、JNSともKJLとも異なっている。

4.3.3. JNSとKJL、CJLとの意味構造の比較

以上、KJL、CJLの二の意味構造を実験的に調べてきた。JNSでは「プロセス性」、「能動性」、「具体性」というカテゴリー化の3つの基準が明確であり、4つの下位カテゴリーの境界もはっきり分かれていた。これに対し、学習者の場合は、カテゴリー化の基準に曖昧さが残り、そのため4つのカテゴリーきれいに四方に分かれておらず、カテゴリー内でも用法が拡散しており、まとまりに欠けていた。また、KJLで「変化の結果」用法で母語の影響と思われるカテゴリー化が見られた。

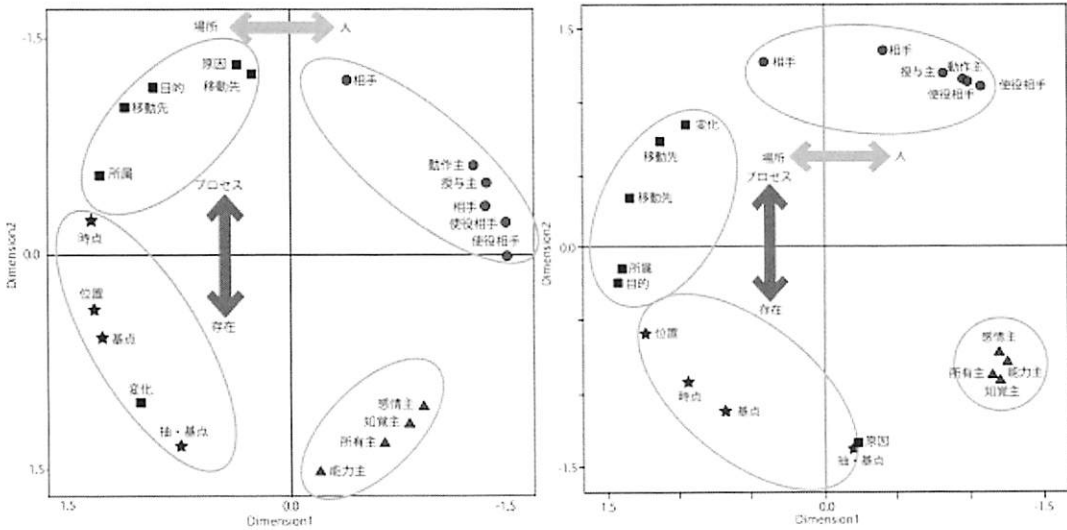


図4 KJL・CJLの「ニ」の多次元尺度解析の結果

4.4. 習得過程

次に格助詞「ニ」の意味・用法が如何に習得されているのかを、認知言語学で主張する意味カテゴリーの拡張構造との関係の中で分析、考察する。

JSLのデータはKYコーパスを用い、中国語(図5のC1~4)、韓国語(図5のK1~4)、英語(図5のE1~4)母語話者の初級から超級までのデータを分析し、レベルごとの「ニ」の意味・用法の使用(正用)実態について調べ、その習得のプロセスを分析、考察した。

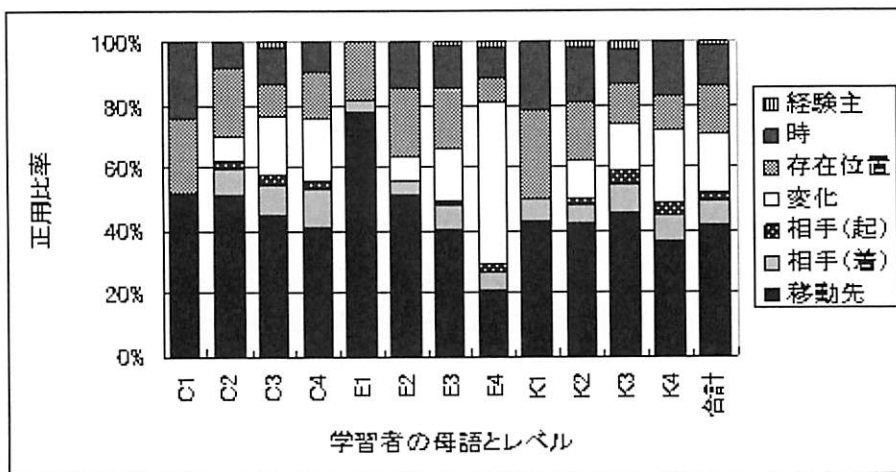


図5 「ニ」の用法別の正用比率の変化

図5はその結果をまとめたものである。「移動先」には「目的」、「存在の位置」には「空間的基点」や「抽象的基点」も含まれる。また「相手(起)」は、「授与主」、「動作主」の用法である。これを見ると、初級では、「移動先」と「存在の位置」の用法が多い。「時点」の用法もそれに次いで多くなっているが英語母語話者では使用が見られていない。韓国語や中国語と異なり、英語では時の情報が後置されることが影響しているのであろうか。中級以降になると「動作の相手」の用法が用いられるようになる。「経験主」用法も上級になるにつれてわずかに用いられるようになるが、全体的に使用は少ない。また学習レベルが上がるにつれて「変化の結果」用法の使用が増えているが、これは多くが「～になる/する」の使用であり、特にレベルが上がるにつれて「～ことになる/する」の使用が増えていくためである。

5. 考察

以上、格助詞ヲ、ニについて意味カテゴリー構造と習得との関係を実証的に明らかにしてきた。以下、意味カテゴリー構造及び習得の関係についてまとめてみる。

5.1. 意味カテゴリー構造

格助詞ヲには「対格」、「場所」、「状況」、「時」の4つの下位カテゴリーが存在していた。このうち、プロトタイプは「対格」用法であった。これらの結果は格助詞ヲの意味構造に関する認知言語学的な観点からの理論的研究(森山2003)とも合致している。

格助詞ニには「移動先」、「動作の相手」、「存在の位置」、「経験主」の4つの下位カテゴリーが存在していた。このうち、プロトタイプは「移動先」用法であった。4つの下位カテゴリーが存在しているという点は格助詞ニの意味構造に関する認知言語学的な観点からの理論的研究(森山2005)とも合致している。プロトタイプについてこれまで、どれをプロトタイプとするかについて、認知言語学的な先行研究において見解が分かれてきたが、今回は「移動先」がプロトタイプであることが実証的に確認された。

このように認知言語学的な観点からの格助詞の意味構造分析は妥当性が確認された。しかしながら格助詞ニのプロトタイプなど、理論的分析や研究者の言語直感(内省)では明らかにしきれない部分も残っており、そのような点については実証的研究が必要であるということが確認された。また認知言語学は使用基盤モデルを提示し、使用を重視しているにも関わらず、これまで意味構造分析に使用のデータをあまり用いてこなかったことは事実で、今後、本稿のように実証的データを兼ね備えた意味構造研究が求められる。

5.2. 習得過程

5.2.1. Kategorie 形成

格助詞ヲについては、KJL、CJLともJNSのKategorieとは若干異なっていた。また格助詞ニについては、下位Kategorieの境界が曖昧であり、一部で母語の影響も見られた。いずれにしてもJNSのKategorieにかなり近づいてはいるものの、一致するところにまでは至らなかった。

5.2.2. 習得過程とプロトタイプ

格助詞ヲでは「対格」、格助詞ニでは「移動先」の習得が進んでおり、第二言語習得過程においてもプロトタイプの習得が早いということは確認できた。但しプロトタイプとKategorie形成との関係、すなわちプロトタイプの習得と定着がKategorie形成を導くのか、逆にKategorieがまず形成され、それを前提としてプロトタイプが習得さえ定着していくのか、などについては更なる考察が必要であろう。

6. おわりに

2000年以降、「応用認知言語学」の名のもとに、認知言語学が言語習得・教育研究へ応用されはじめ、第二言語としての日本語の習得・教育研究への応用も始まっている。本稿の結果により、認知言語学が格助詞の意味構造や習得研究に応用できることが示されたと言えよう。今後、このような研究が格助詞だけでなく、第二言語としての日本語習得・教育研究全般へと拡大、進化していくことを期待したい。

◀ 参考文献 ▶

- 岩立志津夫(1994)「幼児言語における語順の心理学的研究」風間書房。
 大久保愛(1967)「幼児言語の発達」東京堂出版。
 大久保愛(1973)「幼児の文構造の発達—3歳～6歳時の場合—」国立国語研究所。
 早瀬尚子・堀田優子(2005)「認知文法の新展開: Kategorie化と用法基盤モデル」研究社出版。
 水口里香・森山新(2006)「日本語学習者と日本語母語話者の持つ「で」のKategorie構造比較」『日本学報』66:43-54. 韓国日本学会。
 森山新(2003)「認知的観点から見た格助詞ヲの意味構造」『台湾日本語学』18: 291-311. 台湾日本語学会。
 森山新(2005)「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』5: 1-10. 日本認知言語学会。
 森山新(2006a)「多義語としての格助詞デの意味構造と習得過程」『認知言語学論考No.5』1-47. ひつじ書房。
 森山新(2006b)「SLA(第二言語としての日本語)における格助詞デの習得過程に関する認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』6: 464-474. 日本認知言語学会。
 森山新(編著)(2008a)「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究報告書(平成17～19年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)、課題番号17520253、研究代表者: 森山新)」。
 森山新(2008b)「認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—」ひつじ書房
 森山新・冉愛玲(2008)「日本語母語話者と中韓日本語学習者の持つ格助詞デのKategorie構造比較」『人文科学研究』

究』4: 53-66、お茶の水女子大学.

吉田泰子(1976)「二語発話の発達」村井潤一他共編「ことばの発達とその障害」192-204.第一法規.

Kabata, K.(2007) Patterns of acquisition of three Japanese particles by three children. In 10th International Cognitive Linguistics Conference(ed.), Book of Abstracts-general sessions., 114-115.

Tummers, J., Heylen, K. and D. Geeraertsm (2005) Usage-based approaches in cognitive linguistics: A technical state of the art. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 1(2): 225-261.

森山の論文は<<http://jssl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/>>よりダウンロード可能

■ 투 고 : 2008. 5. 31

■ 심사 : 2008. 6. 14

■ 심사완료 : 2008. 7. 11

